



ジェントルハート通信

No. 32 夏号
発行日 2011.8.25

『ジェントルハートコンサート』に込める想い 理事 小森美登里

発行
NPO法人
ジェントルハートプロジェクト

事務局
〒210-0843
川崎市川崎区小田栄1-8-3 青山
Tel & Fax
045-845-3620 (小森)
E-mail admin@gentle-h.net
URL http://www.gentle-h.net

会員登録及びカンパは随時受付中
正会員 1口 2,000円
賛助会員 1口 1,000円
郵便振替
口座番号:00200-8- 111295
口座名義:ジェントルハートプロジェクト
振込用紙に会員の種別を明記下さい



目次:

巻頭コラム	P 1
「指導死」を改めて考える	P2-3
文部科学省の「自殺予防教育」	P4-5
校長日記	P 6
活動の報告と今後の予定	P 7
橋がかかる	P 8

ジェントルハート通信第32号
定価100円 (会員は無料)

不順な天候が続いておりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

ジェントルハートプロジェクトは、予定表をご覧頂いてもおわかり頂けると思いますが、学校の夏休みと共に講演回数が大幅に減少します。今年は夏休み中の教職員の研修なども残念ながらありませんでした。先生方には、是非とも夏休み中の期間を利用して、私達にお声をかけて頂ければ幸いです。

このような状況ですので、夏休み中は、のんびり過ごす事が出来るはずなのですが、実はその間を利用して「第8回ジェントルハートコンサート」開催に向けた打ち合わせを重ねています。

「やさしい心を音楽にのせて伝えたい」との想いで2005年に第1回をスタートしてから、今年で第8回目を迎えます。

これまでを振り返っても、よく今まで続いてきたと思いますし、よくこのコンサートに対して多くのミュージシャンからのご協力が頂けたものだ、改めて多くの出逢いに心から感謝しています。

私達は日頃から人が出逢い、つながる事の重みを実感して活動していますが、このコンサートを通して、この重要性を再認識させられます。

私達は、いじめのない社会を創る為、「やさしい心でつながりたい」というコンセプトのもとに活動し、その想いを多くの方に伝えたいと思っています。

そして、その想いが一つの形として現れたのが、音楽の絶大なる力と天国の子どもたちのメッセージとのコラボレーションという試みをしているこのコンサートです。

私が活動の中で行っている講演は、想いを込めながらも淡々と語り続ける訳で、時間もかなり要しますし、心の奥深くまで届ける為には、話の組み立てに様々な工夫が必要になります。

小学生に対しては、60～70分間の講演を途中で飽きさせないため、また大人に対しては、他人事ではないという事を

実感してもらうため、講演内容にいくつかの仕掛けの様なものが必要になります。

しかし音楽は違います。音楽はたった一曲の短いものでも、心揺さぶり、人の心に寄り添い、涙となったり、生きる力となったりして、その曲のメッセージや感動が人々の心に浸透していきます。

それは、そこに言葉で伝える詩が存在していても、していなくても同様です。

そして、人は心揺さぶるその曲を何度でも聞きたいと思い、感動は一生の記憶となり、聞いたその人の人生を励まし続けるのです。

私は娘が亡くなってから約6年間、本を読んだり、映画を見たり、音楽を聞いたりする事が出来ませんでした。

しかし、ある曲がきっかけでもう一度音楽が聴ける様になり、その時からまた本を読んだり映画が見られる様になったという経験があります。

「ジェントルハートコンサート」は、美しい歌声、美しいメロディー、それらの心揺さぶる数々の音楽と、天国の子どもたちのメッセージが共演するコンサートです。

一人でも多くの人にこの感動を届けたいという思いを持ちながらも、残念ながら会場が満席になるという形で実現できたことが、過去にありません。

会員の皆さまはじめ、いじめ問題に積極的に関心をもたれている方は多くないのが現実であり、いじめがテーマのコンサートというのはそれだけで足が遠のいてしまうのかな?とも思っています。

このままいつまで続けられるのだろうかかと正直不安になる事もありますが、音楽と天国の子どもたちの力を信じ、また、それらの発信者としての責任を痛感しつつ、精一杯頑張ろうと思っています。

チラシが完成致しましたら改めてご案内させていただきますので、皆さまには是非とも11月12日東京FMホールへ足を運んで頂けますことを心より願っております。

◆ 指導をきっかけとした子どもの自殺『指導死』を改めて考える◆

理事 大貫隆志

■ 陵平は何に耐えきれなかったのか
何に絶望したのか

2000年9月30日、私の次男、陵平は自宅マンションから飛び降り、13歳の短い生涯にピリオドを打ちました。中学2年生でした。遺書には「もうたえきれません」と記されていました。いったい何が耐えきれなかったのか。それを、いままでずっと考え続けています。

陵平の死を私は出先で知りました。「陵平が死んじゃったの！」という電話を受けた瞬間、その声の調子から動かしがたい事実を伝えられているのだと覚悟しました。

病院の場所を確認し、車へと乗り込みました。雨がとぎれることなく降っていました。ワイパーをいくら動かしても、前が見えない。10キロほどの道のりが、とても遠いものを感じました。

ベッドの上には、ぬくもりがほとんど無くなった陵平がいました。静かに眠っているようでした。でも、顔に手をかざしてみても、呼吸を感じることはできませんでした。待合室に行くと、警察官と陵平の母親が話をしていました。なぜ警察官がいるんだろう。不審に思い辺りを見回すと、ビニール袋に陵平の服と靴が入っていました。

「陵平がマンションから飛び降りた」

その言葉を聞いて、私はもう立っていることができませんでした。

■ 明るく、人なつこく、負けず嫌い

何にでも一所懸命に熱中した陵平

陵平は、小学校2年生くらいから子供用のバイクに乗っていました。いっしょによく練習もしたし、陵平が自分のバイクで、私はスクーターで、オフロードの耐久レースと一緒に参加したこともありました。真っ黒になった顔をくしゃくしゃにして、「おもしろかった！」と声を弾ませていた様子が、いまもありありと思い返されます。

家族全員で3000メートル級の山に出かけることも、恒例の夏の行事でした。陵平が小学校3年生の夏には、北穂高に行きました。例年になく多い残雪に緊張を強いられながら、ようやくたどり着いた北穂岳の山頂では、ブロッケンを見ることができました。陵平は、空一面に広がる星空にも、目を輝かせていました。八ヶ岳、富士山、南アルプス。厳しい登りが続いても、決して疲れたとは言いませんでした。

陵平は私たちに、たくさんの楽しい時間と思い出を残して、去っていきました。

■ いったい学校で

何が起きていたのか

9月29日、昼休みにひとりの2年生がベランダでお菓子を食べたことを、近くを通りかかった生徒指導主任が「におい」に気づいて発見しました。陵平のクラスでは、帰りの会で担任が「他にお菓子を食べた子はいないか」と聞き取りを行ない、陵平は自分も友達からもらって食べたことを告げています。

他のクラスも含めお菓子を食べた9人の生徒が会議室に呼び出され、2学年の担任、副担任の全員、12名の教師がその指導にあたりました。お菓子の数と食べた生徒の数が合わない、他に食べた子はいないのかなどの聞き取りがすすみ、最終的には21名の生徒が会議室に集まりました。指導は午後4時半から6時まで続きました。最後に「反省文」を書くよう指示されました。「お菓子を食べたことについて書くこと。他に反省すべき点があれば書くこと。学年の皆に自分から進んで貢献できることを書くこと」

翌30日、陵平は以前から予定されていた病院での検査のために学校を休みました。他の20名の生徒は午前中、お菓子についての指導を再度受け、夜に担任が各家庭に電話をすること、その前に親に自分からお菓子の件の話をしておくように指示されていました。

夜9時10分。陵平にとっては予想もしなかった担任からの突然の電話が入りました。

「金曜日に陵平君が学校でお菓子を食べたので、放課後指導をしました。陵平君は友達にもらって食べ、自分から名乗り出ました。今回は食べた子が21名と多く、陵平君のように委員や部長をやっているリーダー格の子が10名くらい入っています。その子たちには、来週予定されている学年集会で決意表明をしてもらうことになります」

「ライターを持ってきている子がいることも分かりました。陵平君の名前もでています。お母さんから確認していただけますか。持ってきた子に関しては、来週、保護者に学校に来てもらいます」

陵平の母親はその後、陵平に担任からの電話の件を伝えた。

「学校でお菓子食べたんだって」

「うん、ごめんなさい」

「ライターを持っていったの」

「ごめんなさい」

この話を終えてから40分後、どすんという大きな音が響きました。陵平が見あたらないため、ドアの外に出て10階から下を見ると、そこに陵平の姿がありました。

陵平の部屋の床には、乱れた文字で書かれた遺書が置かれていました。

死にます

ごめんなさい

たくさんバカなことして
もうたえきれません
バカなやつだよ
自爆だよ

じゃあね
ごめんなさい
陵平

■指導によって追い詰められ

最後には死を選ぶ

陵平のように指導をきっかけに、死を選ぶケースは、ごくまれなことだと私は思っていました。しかし、自殺遺族の集まりに顔を出すようになってみると、数は少ないとはいえ、同じような事件が起きていることを知りました。

あるとき、同じ体験をした親同士で話をしていると、自分の子どもの身の上で起こった事件を、第三者に説明するのが困難だという話題で盛り上がりました。なぜなら、いじめ自殺事件はある程度社会に認知されていますが、指導をきっかけとした自殺は、レアケースです。また、子どものルール違反がきっかけとなっているため、「悪いことをしたんだから仕方がない」と思われがちでした。そのため、せめて呼び名をつけることで、こうした現実を知ってもらいやすくしようと考えました。こうして生まれたのが「指導死」という考えかたです。

私は、「指導死」を次のように定義づけます。

(1) 一般に「指導」と理解されている教員の行為によって、子どもが精神的あるいは肉体的に追い詰められて自殺すること。

(2) 指導方法として妥当性を欠くと思われるものでも、その学校でよく行われる行為であれば「指導」ととらえる。

(例 些細な行為による停学、連帯責任、長時間の事情聴取・事実確認 など)

(3) 自殺の原因が「指導そのもの」や「指導をきっかけとした」ものと想定できるもの。

(指導から自殺までの時間が短い場合や、他の要因を見いだすことがきわめて困難なもの)

(4) 暴力を用いた指導はあってはならないが、日本では少なくない。これをきっかけとした「自殺」は、「指導」によるものではなく「暴行や傷害」によるものと考えべきだが、広義の「指導死」と捉える場合もある。

■一人ひとりの子どもの特性にあった

心理状態に配慮した指導を

子どものルール違反をきっかけとした指導では、どうしたらルール違反や失敗を避けることができるのか、教員と子どもがともに考えていくことが望ましい対応のはずです。しかし、学校での指導は、教員から子ど

もへの一方通行で行われ、子どもの言い分は十分には引き出されず、杓子定規な対応に終始しているように思えます。

「指導」後の自殺事件に関して、学校関係者は「指導に行き過ぎは無かった」と判で押ししたようにコメントします。しかし「行き過ぎがあったかなかったか」を判断できるのは、もうこの世にはいなくなってしまった子どもだけなのです。

明らかなのは「子どもの心理に対する教育的配慮やケア」が欠けていたということです。

過度に心理的圧迫が加えられたり、尊厳が傷つけられたりすると、子どもたちが突発的に死へと追い立てられる可能性があるのです。

2011年2月7日、日光市の中学2年生の男子生徒が、指導中に教室に一人残され、直後学校を抜け出し、鉄道自殺しました。軽微なルール違反に対して「複数教員による長時間の指導」が行われ、その上、親を学校に呼び出すことを生徒に告げています。生徒は「親は呼ばないでほしい」と頼んでいますが、聞き入れられませんでした。

校長は記者会見で「深い反省を促すため、問題があれば両親に来校させる」と発言しています。この生徒はまさに、自らを深く反省し、生きるに値しないとまで思い詰めたのです。こうした「指導」に悪意があったわけではないでしょう。むしろ、生徒を思う「善意」があったと信じたいと思います。しかし、その「善意」が子どもを追い詰め、死へと追いやったと想像できます。たとえ指一本ふれなくても、教員の言動などによって子どもが死に追いやられることを、教育関係者は知るべきではないでしょうか。

参考情報

追い詰められて「死」に至る子どもたち

～日光市立東中学校の場合～

JANJAN BLOG 三上英次氏による記事

<http://www.janjanblog.com/archives/32522>

陵平Webサイト

<http://www.2nd-gate.com/ryohei.html>



第3種郵便物認可

小中高で自殺予防教育

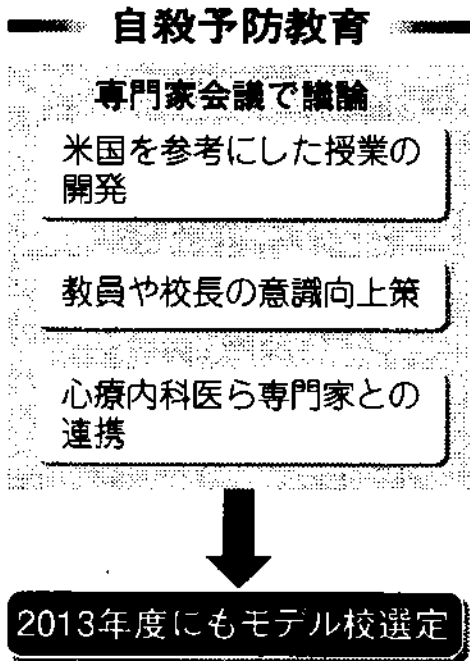
13年度にもモデル校選定

文科省

子どもの自殺を食い止めようと、文部科学省は7日、小中高校に自殺予防教育を導入する方針を決めた。先進的な米国の教育を参考に、授業にどう取り入れるかを近く設置する専門家会議で議論する。ストレスとの向き合い方や、悩みを一人で抱えない対処法を学ぶことを想定し、2013年度にもモデル校を選ぶ。

文科省によると、10年度の児童生徒の自殺は147人で、ここ数年は年間150人前後で推移している。原因はいじめがクローズアップされることが多く、対策を強化してきたが「実際は家庭環境や不安など多様な要因が絡んでいる」（文科省幹部）とされ、抜本的な対策に結び付いていないのが実情だ。

このため文科省は、自分がストレスを感じた際の対応や、友人の変化に気付い



た場合の接し方などを身に付けさせて自殺者を減らした米国の予防教育に注目した。米国の学校は授業で、地域にある相談機関を教えた

り、友達から深刻な悩みを打ち明けられたら大人に話すことをアドバイスしたりしている。アンケートで自殺の危険が高い子を教員が見つけた場合、カウンセラーらにつなぐこともある。

専門家会議では①米国を参考にした実践的な授業方法の開発②教員や校長がより子どもに配慮するための意識向上策③心療内科医ら地域の専門家との連携の在り方などを中心に具体策や課題を検討する。

子どもを刺激する可能性があるとして、学校では自殺を授業で取り上げることへの抵抗感もあるが、文科

省は「予防教育が効果を上げれば、全国で年間3万人を超える自殺者全体を減らすことにつながる」としている。

◆子どもの自殺 文部科学省の問題行動調査では児童生徒の自殺者数はここ数年、年間150人前後で推移しているが、500〜600人台（19歳以下）という警察庁の統計より大幅に少なく死亡理由も約6割が「不明」となっている。背景には、遺族が学校に自殺だと明らかにならないことなどがある。同省は6月、子どもの自殺の全体的な傾向を把握して予防に役立てるため、自殺と断定したケースだけでなく、可能性があれば死亡に至る背景を全て挙げて報告するよう全国の教育委員会などに通知した。

2011年8月8日付
神奈川新聞 朝刊

◆ 文部科学省の自殺予防教育◆

理事 武田さち子

文部科学省は、いじめ問題の解決もままならぬ中、今度は自殺予防教育導入の方針を決定しました。

文部科学省は、子どもの自殺は学校問題より家庭問題のほうが大きいと考えています。そして、警察庁の統計より、文部科学省の統計が大幅に少ない理由を「遺族が学校に自殺だと明らかにしないことがある」からだとしています。

しかし、昨年当法人が実施した「当事者と親の知る権利アンケート」(自殺23人、自殺以外の死亡15人、生存13人)では、自分の子どものことが統計上どのように処理されたかを51人中40人(80%)が「知らない」と答え、「知っている」と答えたのはわずか8人(16%)でした。しかも、自分たちが認識している事実や原因と一致していると答えたのはわずか1人(11.1%)、「ある程度一致している」1人(11.1%)、「あまり一致していない」2人(22.2%)、「まったく一致していない」4人(44.4%)です。

当事者たちからきちんと情報を吸い上げず、自分の子どもの情報がどのように処理されたかを知らせないで、学校が教育委員会に報告した数字のみがひとり歩きしています。このように、正しい現実を把握することなしに、本当に有効な自殺予防教育ができるでしょうか。

私たちは、文部科学省の「自殺予防のための調査協力者会議」でのヒアリングでも、自殺だけに焦点をあてても自殺は防止できないこと、いじめや教師の不適切な言動を防止して、子どもの心を追い詰めないことが結果的に自殺の防止につながるという話をしましたが、理解されなかったようです。

また、仮に家庭の問題が大きかったとしても、学校が家庭に対してできることには限界があります。まずは自分たちの足元の問題から、取り組むべきではないでしょうか。問題から目をそらせないようにすることが、とても重要なことだと思います。

文部科学省の統計で新しい基準を採用した2006年度から3年連続して、いじめ認知件数は減少を続けていましたが、2010年度、いくつかのいじめ自殺が大きく報道されると、東日本大震災で被災した東北3県を除いた数字であるにもかかわらず、再び増加に転じた(いじめ件数が減るとなぜか増える傾向のある学校内暴力件数は前年度から若干減少)。現象面だけに注目して抑え込もうとしても、数字の付け替えが起きるだけで、何ら問題解決にはつながりません。自殺予防プログラムより、子どもたちが互いを尊重しあえる関係をつくる教育のほうが、自殺防止に効果があるのではないのでしょうか。

そして、警察庁の職業別自殺者統計で、2010年度の「教師」の自殺は146人。内「うつ病」が50人、「勤務問題」が52人(原因・動機は1人につき3つまで)です。教師の心が健全でなければ、死に追い詰められている子どもを救うなどできるはずがありません。新たな教育プログラムを増やして教師をますます忙しくさせるより、教育予算を増やし、人員を増やし、人的サポート体制を充実させて、教師が一人ひとりの子どもに向き合える環境を整備してこそ、子どもの自殺も、教師の自殺も減らせるのではないのでしょうか。

文部科学省の児童生徒の自殺者数と警察庁の職業別(学生)自殺者数 (人)

年度		小学校		中学校		高校		合計	
		自殺	いじめ自殺	自殺	いじめ自殺	自殺	いじめ自殺	自殺	いじめ自殺
2007	文科省	3	0	34	1	121	4	158	5
	警察庁	8	0	51	1(1:0)	215	6(3:3)	274	7(4:3)
2008	文科省	0	0	36	1	100	2	136	3
	警察庁	9	0	74	5(4:1)	225	6(3:3)	308	11(7:4)
2009	文科省	0	0	44	1	121	1	165	2
	警察庁	1	0	79	3(1:2)	226	4(2:2)	306	7(3:4)
2010	文科省	1	0	41	4	105	0	147	4
	警察庁	7	0	76	3(2:1)	204	1(1:0)	287	4(3:1)

※警察庁の数字は、遺書等の自殺を裏付ける資料より明らかに推定できる原因・動機を3つまで計上。

※警察庁のいじめ自殺(内)は、左が男子、右が女子。

※文科省統計には、「自殺した生徒が置かれていた状況」を「当該項目は、自殺の理由に関係なく、学校が事実として把握しているもの以外でも、保護者や他の児童生徒等の情報があれば、該当する項目を全て選択するものとして調査」との説明があるが、2010年10月23日自殺した群馬県桐生市の上村明子さん(小6)の自殺原因を遺族は「いじめが原因」としているが、「不明」になっている。

◆ 校長日記 ◆

NPO法人ジェントルハートプロジェクト 理事・事務局長 川崎市立富士見中学校 校長 青山正彦

富士見中学校に今年4月に着任してから5ヶ月が過ぎようとしています。前任の市民・こども局では東日本大震災避難者の方々への受入れなどの対応が間際まで続き、全くの準備不足の慌しい中で、4月を迎えました。「校長日記」的なものは6月ぐらいに載せることが出来ればと、ジェントルハートプロジェクトの運営委員会でも話していましたが、大方の予想を裏切ることなくこの季節に1回目となりました。戦後の学制改革による新制中学校の歴史は64年になりますが、川崎市でのいわゆる「民間校長」の採用は初めてケースとしていやが上にも目立つ存在でスタートとなりました。この後、日記が何回掲載出来るか全く不明ですが、初回は公立学校という存在がもつ長所・特徴である「地域性」「平等性」「多様性」について載せたいと思います。

第一には「地域性」。「地域に根ざした」ということが、公立学校の第一の特徴となります。校区の枠が取り払われた学校選択制などもあります。一般的には小学校や中学校の校区は、ある種のまとまりや繋がりを持った「地域」を基盤としています。公立学校は様々な人々が暮らす「地元の学校」として存在し発展をしてきています。公立学校が持つこの性質は、「ある教育理念・方針への賛同にもとづく選択」を旨とする私立学校の原理ときわめて対照的なものであります。「地域に根ざした」公立と「選択にもとづく」私立。公立学校は「コミュニティ＝生活共同体」としての性格を強くもち、一方の私立学校は「アソシエーション＝結社」としての色彩を強く帯びると位置づけられます。

第二の「平等性」。これも、第一の特徴と関連した重要な側面であります。その地域に住む全ての人に対して門戸が開かれていること。誰もが望みさえすればその学校に入ることが出来ることとなっています。今日の日本には、様々な理由・経緯でたくさんの「ニューカマー」外国人が居住するようになってきており、多くの子どもたちが日本の、そして川崎の公立学校に在籍しています。それは、この平等の原則によるところが大きいとされています。経済的な障壁があれば、というよりそれ以前に「外国人は入学を認めない」といった制度的な障壁があれば、子どもはそもそも日本の学校に入ることができず、決して安価ではない「民族学校」に通うしか選択肢がなくなってしまう。「未就学」状況をつくらないため

にも、様々な国の人と多様な文化を育み、暮らしを豊かにするためにも、公立学校の役割は重要であると言えます。

第三の「多様性」。これは最も大事にしていきたいポイントであります。ここで言う「多様性」とは、「そこにはいろいろな人がいる」という事態を指し、端的に言うならば「いろいろな人がいるからこそ、公立学校は多様でおもしろい」と考えたいと思います。

第一の特徴で記した「地域」には、多様なバックグラウンドやライフスタイルや経歴をもつ、様々な階層に属する人が住んでいます。そして彼らの子どもたちの多くが、地元の公立学校に入学をしてきます。たまたま出会った公立学校の教室のなかで、彼らは、ぶつかり合ったり、助け合ったりしながら、そして、様々なタイプの教職員や大人たちとも係わりながら、自分なりの成長を遂げていくこととなります。公立学校の「多様性」は、「異質なものの同士の相互作用」を引き起こし、新たなものを生み出すダイナミズムは、公立学校が有するかけがえのない長所だと思っています。

「地域に根ざした、平等で多様性」をもつ公立学校では、たくさんの友人と教職員との出会い、日々の学習のなかで培った基礎的な学力、様々な活動や行事のなかでの成功・失敗体験、部活や受験で得た教訓、自分とは違う考えや感覚をもった他者との付き合いなど、これらの長所・特徴をもつ公立学校での「互いの違いを認め合い尊重する」ジェントルハートの活動の趣旨を活かすことは、意義深いものと思っています。

自分が価値ある存在であると感じていること、自分自身に対して肯定的な感情をもつこと、「不完全な自分で失敗もたくさんするけれども、精一杯自分らしく生きようとしている大切な自分」の姿を受け入れられるとき、ほかの人の「不完全さ」や「失敗」も、きちんと受けとめやすくなるといわれます。

たまたまの縁で出会ったもの同士が、同じ場所で長い時間を過ごしていくなかで何かをつくりあげていくのが、教育であるとするならば、公立学校は、それがなされるにふさわしい長所と特徴をもった場があります。そのような場で中学校校長としてこれまでの行政経験、ジェントルハートプロジェクトの活動経験が活かされれば幸であると思っています。

◆ 活動のご報告と今後の予定 ◆

日付	主催者	都道府県	都市	参加人数
2011/7/1	横浜市立永田小学校	神奈川	横浜	330
2011/7/4	島田市立島田第一中学校	静岡	清水	550
2011/7/5	横浜市立港南中学校	神奈川	横浜	1000
2011/7/6	野田市立第二中学校	千葉	野田	450
2011/7/7	新潟市立白新中学校	新潟	新潟	270
2011/7/7	新潟市教育委員会教職員研修会	新潟	新潟	200
2011/7/8	魚沼市立小出中学校	新潟	魚沼	450
2011/7/9	文京区立茗台中学校	東京	文京区	330
2011/7/14	島田市立島田第二中学校	静岡	清水	700
2011/8/2	和歌山県立和歌山西高等学校	和歌山	和歌山	440
2011/8/7	教育科学研究会学校部会	神奈川	横浜	40
2011/8/22	人権同和教育指導者養成講座	新潟	新潟	200
2011/9/2	田村市立船引南中学校	福島	田村	110
2011/9/6	川崎市立白幡台小学校	神奈川	川崎	200
2011/9/17	関東学院六浦中学校	神奈川	横浜	230
2011/9/17	風のとびら 自殺予防週間	東京	杉並	70
2011/9/24	生命のメッセージ展	東京	日野	
2011/9/28	富山市立奥田中学校	富山	富山	250
2011/10/3	川崎市立新町小学校	神奈川	川崎	130
2011/10/6	品川区子育て支援講座	東京	品川	40
2011/10/7	生命のメッセージ展	東京	港区	
2011/10/13	川崎市立新町小学校PTA成人委員会研修	神奈川	川崎	20
2011/10/31	栃木県立小山西校等学校	栃木	小山	700
2011/11/7	三条市立第一中学校	新潟	三条	800
2011/11/9	聖学院中学校	東京	北区	200
2011/11/15	流山市西初石小学校教員研修会	千葉	流山	20
2011/11/17	新潟市立東西小学校	新潟	新潟	70
2011/11/21	千葉県立安房拓心高等学校	千葉	南房総	500
2011/11/24	横浜市立日野小学校	神奈川	横浜	220
2011/12/1	横浜市立領家中学校	神奈川	横浜	650
2011/12/9	備前市立日生中学校	岡山	備前	120
2011/12/12	新潟市立潟東中学校	新潟	新潟	200
2011/12/14	荒川区教育研究会生活指導部会	東京	荒川	20
2011/12/16	千葉県立一宮商業高等学校	千葉	長生郡	560
2011/12/17	NPO法人「青い空」シンポジウム	東京	板橋区	300
2011/12/20	千葉市立稲毛高等学校附属中学校	千葉	千葉	260
2012/1/31	静岡県立川根高等学校	静岡	榛原郡	230
2012/2/15	岡山少年院	岡山	岡山	60



◇ 橋がかかる ◇ ひとつひとつの出会い、そこにかかる橋

ここでは毎回ジェントルハートプロジェクトに関わる方々の思いなどを自由にお書き頂くコーナーです。今回は新潟市立白新中学校の坂哲也先生にお願いいたしました。

『私たちの宝』

新潟市立白新中学校 生徒指導主事 坂 哲也
“いじめ防止”を推進するというねらいから、この度ジェントルハートプロジェクトの小森美登里さんから、本校でご講演いただきました。切として訴えるそのお言葉には、何度となく深い感銘を受けました。私も二児の父親ですが、教師としてだけでなく、親として、本当に小森さんのお気持ちが伝わってきました。それは、その場にいる人もそうであったと言えます。生徒の感想をいくつか紹介します。

< 生徒感想より >

「改めて、いじめは絶対にやってはいけないと思いました。いじめは、いじめる側が100%悪いと思います。いじめる側がどんな言い訳をしても、いじめをしたことには変わらないので、絶対悪いです。印象に残ったことは、『誰でも“自由の翼”を持っている』ということです。この言葉の通りにどんな人でも生きる権利を持っていると思います。生きる権利を持っていない人など存在しないと思います。これまでにいじめで亡くなられた子どもたちがとてもかわいそうだと思います。精一杯生きようという気持ちがなくなるまでいじめをされてしまったのだと思います。最後に、これからはいじめを絶対にしないことを誓います。そしていじめをしている人がいたら絶対に止めたいです。そして亡くなった人の分まで全力で生きていきたいです」

「講演を聞いて、いじめについて深く考えることができたと思います。いつも普通に過ごしているけど、教室にはだれかがいじめられているかもしれないということを知って、自分はいじめをしていないから関係ないということではなくて、やっぱりいじめをしている人に対しては、いじめをやめさせたり、いじめをされている人には、話を聞いてあげたり、それを受けとめてあげたりして、一つでも今起こっているいじめがなくなればいいなと思いました。そして、自分はいじめではないと思っていることでも、相手には嫌な言葉だったりするときがあるかもしれないので、その時は少しでも相手が嫌だと思った言葉かなと思ったら、ちゃんと謝って、ずっと友達と仲良く過ごしていけたらいいなと思いました。『やさしい心が一番大切だよ』という言葉聞いて、まず、自分から他の人にやさしくしたりしていけば、他の人もやさしくなっていくのではないかなと思いました。この言葉には、たくさんの意味が込められていて、いつも心にしまっておこうと思いました」

「小森さんがつくった『生まれてきてくれてありがとう』という詩を聞いたことがすごく印象に残りました。大人から子どもへの気持ちをあまり聞くことはないので、自分の親もそん

なふうに思っているのかなと考えると、じーんとくることが多かったです。親にたくさん迷惑をかけても、それをちゃんと受けとめてくれると思うと、うれしかったです。私は悩むことがあると、悪い方に考えることが多いので、一人で抱え込まずに、しっかり受けとめてくれる人に相談することも大切だなと考え直すこともできました。昔からお母さんに言われていた『自分がされて嫌なことは人にしない』というの、もう一度しっかり思い出すことができました。これからは、自分の存在を大切に生きていくのと同時に、他人の気持ちを考える、優しい心、思いやる心を大切にして生きていこうと思いました」

また、2年生で出された学級通信では、保護者の方にも一緒になって考えてもらえるように、担任が小森さんの思いがこもった詩である『生まれてきてくれてありがとう』を自筆で書いて伝えていました。

この詩の中にある『全ての子どもたちへ 生まれてきてくれてありがとう』は、私自身もたいへん共感しました。子ども一人一人が、私たちの宝であり、存在だと私も常日頃から思っているからです。そのかけがえのない子ども一人一人が、将来にわたって自信をもち、たくましく生きていけるようにしていくことが私たち大人の役目です。人としての尊厳を壊し、心を壊してしまう“いじめ”は、絶対に見逃してはならない行為です。一度いじめられて心に大きな傷を負った人は、物事をよい方向に考えられず、結果うつ病になってしまうこともあるそうです。今、心が病み働けなかったり、人と関わらず、引きこもったりする人が増えています。まずは私たち大人が、子どもを教え導く自覚をもち、いじめを見逃さず、子どもたちの心に寄り添っていかねばいけません。そして、将来のよりよい日本を創造していく子どもたちを学校や家庭、地域が連携し、しっかりと育てていかなければならないと改めて決意させられた講演会でした。

